

権利性と公共性をともなった歴史的自然景観 夙 川公園の桜を事例に

著者	金菱 清
雑誌名	人間情報学研究
巻	15
ページ	82-98
発行年	2010-03-25
URL	http://id.nii.ac.jp/1204/00024080/

権利性と公共性をとめた歴史的な自然景観 —— 夙川公園の桜を事例に ——

金菱 清*

The right and publicness in historic landscape preservation by referring to a case study of cherry blossoms on a promenade of Shukugawa park, Nishinomiya

Kiyoshi KANEISHI

Abstract

One of the theoretical and practical problems on the preservation of historic landscape is that to who the right to preserve is entitled. This is the first question in this paper. In fact, those who have legal land ownership have always prevailed against the many movements to preserve the landscape. However, an attempt of landscape preservation potentially brings about “enclosure” of the scenery. Here, the “enclosure” means a practical right, not legally secured, to exclusively own the landscape by a specific group of people. The second question to refer lies in this phenomenon. In order to avoid the “enclosure”, how can the landscape remain public? This second question is on the premise that the landscape should stay public sphere where anybody can participate regardless of attribute, property, social identity or class. Nevertheless, the landscape as public sphere can also vanish in vain, because although it has to admit anybody without restriction, the right to preserve the scenery is based on a specific place and history. Hence the right to preserve the landscape is unavoidably vulnerable.

In short, the historic landscape preservation is placed in a dilemma; the “exclusive” right or the “open” public sphere. Therefore, this paper attempts to overcome the dilemma by asking how can both the right to preserve the landscape and its’ character as public sphere stay valid. The paper will answer to this question by referring to a case study of cherry blossoms on a promenade of Shukugawa park, Nishinomiya.

Keywords : right, publicness, landscape preservation

* 東北学院大学教養学部准教授 Tohoku Gakuin University E-mail : soms9005@yahoo.co.jp



図1：西宮の位置関係（Yahoo Japan地図より筆者作成）



図2：赤囲拡大図（Yahoo Japan地図より筆者作成）



図3：緑囲拡大/航空写真（Yahoo Japan地図より筆者作成）

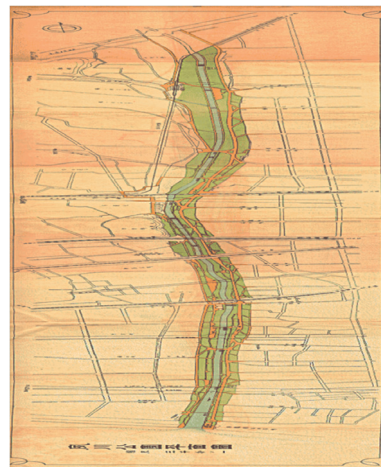


図4：1932年当時の夙川公園平面図



図5：夙川公園と松林に映える2000本の桜並木



図6：桜の開花時期になると大勢の市民が花を愛でる



図7：赤囲拡大/都市計画道路の位置図
(<http://www.nishi.or.jp/homepage/douroken/yamate/> 西宮市のHP)



図8：グリーンベルト地帯（夙川公園）が住宅街に広がる

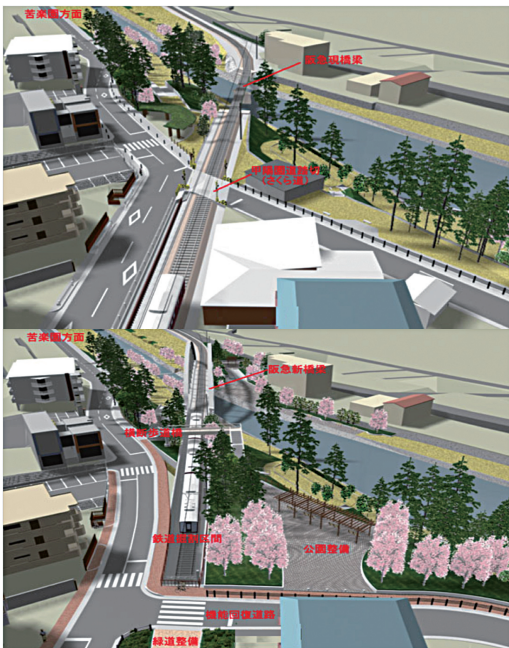


図9：現況(上)と都市計画後(下)のシミュレーション (同上 西宮市のHP)



図10：一般的な河川（上）との比較



図11：桜を伐採する都市計画に反対する立て看板

権利性（環境権）と公共性

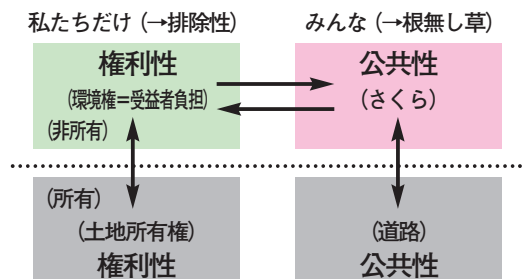


図12：権利性と公共性の両立の理念図

1. 1 歴史的景観における「権利性」と「公共性」のジレンマ

近年、歴史的景観保全に、一筋の光明がさしこんできている。国立市のマンションの高さ制限訴訟や軒の浦埋め立て差し止めの訴訟である。2002年東京地裁は、高層マンション建設によってこれまで長期間にわたり継続して形成されてきた国立の並木道の景観と近隣の地権者の「景観利益」が侵されたという異例の判決を出した。建築基準法に違反していないにもかかわらず、景観に権利性を認めた初めてのケースとなる。この歴史的景観がもつ意味は、必ずしも土地所有者ではない周辺の方権利者がその土地に関わることでできる「権利」の道筋をつけたことにある。

すなわち、これまで景観の保全運動は、その景観を支える土地そのものを買取り、その歴史的風景を保存しようとするナショナル・トラストや歴史的建造物が所有者の負担によって維持され保存されている（木原 1982）というように、風景とその土地所有者とを一致させることにあった。それに対して今回の判決は、風景とその土地所有者といういわば空間の縦軸が一致しないような場合、その風景は必ずしもその土地所有者でなく、周辺住民がその土地の景観を所有するような権利の動きとなっている。

だが景観の権利性の根拠として「ある特定の地域における地権者が…景観利益を有するに至ったと解すべき」という判決文に表れているように景観の権利性は「前例」を作ったことで大きな意味をもつが、他方で曖昧な基準で「解釈」に委ねる部分が非常に大きいというのが現状である（森川 2003）。このことはもちろん法律の分野からは普遍性に欠けるというこ

とで、権利性における「欠陥」として描くことは可能であるが、むしろ逆に景観という権利が、地域の歴史性及び固有性に委ねられている部分がいかに大きいのかという評価ともとれるだろう。

したがって、歴史的景観を考える際の理論的・実践的課題は、土地所有者の財産権への対抗軸として、景観の「権利性」がいかに担保されうるのかという問題が一点ある。それは保全せずに開発しようという意思を持った所有者に、非所有者が保全を働きかけることができず、多くの景観運動があえなく敗退してきたことを背景としている（堀川 2001）。だが同時にこの獲得されうる権利性は景観の囲い込みに結びつく危険性が常に存在する。景観の囲い込みとは、景観の権利が確立した際、この景観は「われわれのものである」として取り囲んで自分たちのものだけにしてしまう現象をさす。景観の囲い込みの回避のためには、この景観は「みんなのものである」という景観の「公共性」がいかに担保されうるのかというのが二つめの理論的・実践的課題である。ここでの公共性は、その成員の属性や社会的アイデンティティ、地縁や血縁、身分や階級といった同質性を問わないことによって、利害関係から解き放たれた他者が参入できる空間を想定している（梅木 2002）。だがこの公共性もまた景観の「根無し草（没場所性）化」（レルフ 1991）に結びつく危惧がある。公共性の根無し草とは、景観という個別具体的な場所性を介在させないような空間を設定してしまい、権利性を問われた場合、雲散霧消してしまう危うさである。

以上のことをまとめると、歴史的景観には、景観の「権利性」と「公共性」という相矛盾する課題が存在し、どちらかを選択すれば解決さ

れるわけではない。本論文の目的は、歴史的
自然景観における権利性と公共性の具現化をメ
タな倫理状態とおき、それらをいかに両立させ
るのかという理論的・実践的課題に答えるもの
である。具体的には、兵庫県西宮市にある夙川
公園の桜樹と松樹の伐採問題を事例にしながら
論じる。結論を先取りしてしまえば、80年近く
も前に西宮市が受益者負担制度という今でいう
「環境権」の仕掛けをもとに夙川公園を整備し
たことが、現在の「夙川の桜」という荘厳な歴
史的な自然景観を生み出し、誰しもがその景観
の豊かさを享受することが可能になった（「公共
性」）ということをあきらかにする。

1. 2 景観の身体化と意識化

はじめに歴史的景観の位置づけをしておこ
う。歴史的景観は単なる過去の事実の集積で
はなく、われわれのアイデンティティ形成のよ
りどころとなる、この社会が蓄積してきた経
験をさす（片桐 2000）。いわば、何が歴史的
真実かという歴史学の実証主義と距離をおき
つつ、現在の現実的必要性から歴史を取り扱
うものであるとすれば、それは常に「現在の要
請」が関わってくることになる。すなわち、
現在のコミュニティにおけるアイデンティティ
の形成は、文化的社会的関係の文脈のなかで
「過去」を概念化し焦点化し構築するプロセ
スと切りはなせないものなのである（Yelving
ton 2002）。後述するように、桜の伐採問題
という自然環境に関わっている当の運動者の
間で、自分たちが携わっている自然景観が統
合されていく様子を運動者は次のように語っ
ている。「こんな活動（道路計画に反対して公
園の桜を守る運動）をしているのに、自分の
じっさんがこんなこと（公園の

整備を行った際の当の市議会議員）をやっ
ていたなんて全く知らなかったなあ。（祖父の）
遺伝子がさわいでいるんだなあ」（Y氏）。

歴史的景観保全の運動は、「何か守るべき
歴史的価値がはじめにあって、それに継続的
な働きかけをしてきた」というイメージで考
えがちであるが、ここではそれが逆転してい
る。先に無意識のうちに活動をしていた行為
があって後から意味が付与されている。どう
してこのようなことが生じるのか。ここに歴
史的景観を論じる際にどこに定点をおいて
その景観を保全するのか、という難しさと重
要な論点が含まれている。なぜ難しいか。そ
の答えはややラディカルに言えば、歴史的
景観保全とは、いったんその景観が成り立
った歴史性を「喪失」することによって成り
立つからである。

以上のことを整理するために役にたつのが
、柳田国男の論を展開した藤村安芸子の風景
論である。彼女は、「自分がもたらした草木の
色が、天然自然の中にとけ込み、美しい色と
して照り映えるとき、それは代々の人々にと
ってのよりどころとなる」という。このよう
にある景観を「継続」した時間軸に置くこと
は、たいへん通俗的な解釈であるが、彼女
はそれだけでは自然景観を捉えることはで
きないことを述べている。すなわち、「柳田
が求めたのは、人々の心持ちがおのずから
一致することによって新しい風景が生まれ、
それが永きにわたって周囲の天然と調和す
ることであつた。このように美しい風景が
生まれるためには、一方で無意識のうちに
忘れ去っていく人々が必要であるとともに、
改めてそうした風景と人々のかかわりを捉
え直す営みが必要であつた。そのことによ
って、これまで積み重ねられてきた変化の
歴史やその風景の美点や欠点を知り、より
よき方向へ向かう

ことができる」(藤村 2002:100) のだという。

自然景観には時間の「継続」性がある一方で、「断絶」が必要である。これは一体どういうことか。原生林のような何万年前の自然ではなく、ここで捉えられているのは、人間の側が植えた樹木がいかにしてその人間が関わった痕跡を滅却していくのかという過程を描いたものである。つまり人工的に草木を植えた時分にはまだ「ごちない」自然であるので、風景としてその体をなしていない。だが時間が経過するにつれて、人々が変わりその植えた当時の関わりの記憶をなくすことで、周囲の自然にとけ込み「なめらかな」自然の風景に発展したり成長したりする。いわば「ある土地に根づいて生きる人々が日頃目にする事物は、それになじめばなじむほど注意の視線から遠ざかり、人々の身体に接近し」、「沈黙のうちに生きられる風景を構成する」(木岡 2002:42-3) のである。後世の人々が生まれた時からそこにすでにあったという意味では所与の環境となる。「人工」的な自然美をあたかも「自然」であるかのように見ることができる時間の幅がだいたい「代々(親・子・孫)の人々」の時間として想定されうる。したがって、自然景観における歴史性とは、人々が無意識のうちに忘れていき、当たり前の風景として「身体化」される時間を必需とする。なおかつ歴史的な自然景観という際には、逆に先代が関わってきた風景を今度は現代的な課題および要請のもとに「意識化」して捉えなおすという相矛盾する作業を経てこそよりよき方向に向かうことになる。なぜなら、「日常の習慣的な生が無償に保たれているかぎり、現在からの距離をつくり出す必要はなく、何かを語るということも不要である。しかしわれわれは、変貌する世界を前に、自己の拠って立つ足場を絶え

ず見直す必要に迫られ」(木岡 2002:50) ているからである。

以下、歴史的な自然景観がどのような現代的要請のもとに再編され、意識化されるのかを考える。すなわち、歴然とした桜の歴史的景観と人々の意識とをつなぐ理論的な作業を本論文で展開していく。そのことで、まず歴史的な自然景観における景観所有の権利の正当化の道筋をたてることにする。そのあと歴史的な自然景観が新たな公共的価値になりうることを述べたい。

2. 1 パターナリスティックな図式

反対運動が生じている兵庫県西宮市の阪急甲陽線の地下化の問題は、そもそも1946年に戦災復興関連により都市計画決定された西宮市の都市計画道路の計画(以後3回変更)に端を発する(図7参照)。西宮市は阪神間の中心部に位置し(図2)、立錐の余地もない住宅地や工業地帯において航空写真からもくっきりとグリーンベルト地帯がある(図1・3)。そのなかで生じた問題は、簡単にまとめると、鉄道を地下に潜らせることによって、県道と市道を立体交差させる事業計画である(図9のCG参照)。そのメリットは、地表の軌道を道路用地として用いて、用地買収をスムーズに行える点と立体交差化が国の進める国土の高度利用と一致するため、補助金が平面交差に比べ多く国から支出される点にある。一方で、この計画によって、433本の桜樹と松樹などが伐採・移樹されることになる。こうした186億円にのぼる計画に対し、沿道の住民を中心に反対の意思表示^①がでることになった。道路建設をめぐる行政対住民という古典的な図式であるが、主な争点としては、現在の阪急の鉄道橋梁を南側に架け替える

ことによる、夙川兩岸にある桜松樹の伐採・移樹である。住民参加を踏まえたまちづくりが常態化するなかで、行政運営が「硬直化」したものとなっている。

そこで、論点を整理するために、古典的だと言われる行政と住民が何を基軸として対立しているのかをまず押さえておきたい。過去から現在に至るまで、都市計画道路「山手線」および「建石線」と阪急甲陽線の立体交差事業に係る説明会が10回程度（1997年～2001年）開かれている。そこでの住民側の主な運動の方向性は、単なる住民のエゴとしてみなされることなく、道路周辺住民と行政（西宮市・兵庫県）が対等な立場で論議できる協議会を発足させることが一点。もうひとつは、そこでの参加者なり関係委員が協議したもので合意および同意を取り付け、都市計画審議会にかけるというものである。いわば実質的な話し合いの前の「手続き」づくりを模索している現状にある。このことを大きく見た場合、「対抗的公共圏」を作りだす途上であって、市に対峙するための「権力化」のプロセスとみることができる。だが、このような住民による「対抗的公共圏」は、話し合う前の手続きづくりの段階で市側によってなし崩しにされる。

まず、会則の中に「周辺住民の同意がなければ都計審（都市計画審議会）に諮問しない」の旨を明記するのかどうかという住民の要望をめぐって、そもそも協議会という名称は、事業が進捗し、その事業によって移転を強いられたり影響を被る沿線住民という「受苦圏」の権利者が明確になった時点で用いるべきもので、その前段階で、意見交換をして市と住民が理解を深め合うということが行政の言い分である。一見すると聞こえはいいが、仔細にみてみると、同

等の立場としての意見交換ではなく、最後には市側による一方的な説明を行う構造的なからくりになっている。

たとえば、話し合いの中で住民の方から道路課に対し、「住民の意思を尊重するために（道路課が）お出になっているわけですね。そうであれば会議を開く必要は全くない……都市計画道路としてこれは絶対的なものだという前提に立って（市側が）物をいわれているから、それは違うのではないか」と問いかける。すると道路課は「都市計画決定されたものは、我々にとっては絶対的なものであります。その中で変更しようとしているわけです。その変更がいいのかどうか、あるいは、変更後の事業を進めるに当たり、どういうやり方がいいのか、皆さん方とも話し合いをし、協議させていただきたいということであり、現行ある都市計画決定されている山手線についてよしあしを議論することをお求めになっているのであれば、我々は、合意できない。合意するとかしないとか意思の問題ではなく、そういう決め事であり、現行ある都市計画の話になりますと私どもの行政の権限ではないということです」（第3回協議会議事録）と繰り返すあるパターンが決まっている。

すなわち、西宮市の言う意見交換とは、事業の本体部分に関する協議ではなく、事業の着工を前提にした話し合いである。したがって、計画後の遊歩道をどうするのかという話や、樹木をどこへ配置したらよいのかという些細な変更に関して、意見交換を求めているのである。当然市側からすれば本体部分について議会の議決を得た計画は見直すことができない立場になっているので、住民にしてみれば一方的な市側からの説明ととられ不満の残るものとなっている。

このことを行政の側がいかに「パターナリスティックなレトリック」でもって反対運動を操作しようとするのかを、長良川河口堰を事例にして足立重和は詳しく論じている（足立2001）。そこでのレトリックとは、反対運動側の不安や不満を一律に解消しようとする説明の仕方であり、行政側が常に住民や市民よりも多くの情報を保持しているかのようにふるまい、形式的には対話をしているようにみえながら、実際には「他者」との対話を拒絶していることにある。そのような構造のもとでは、議論を重ねれば重ねるほど、ますます両者の間の対立は深まるという結果に終わる。

現にこのような話し合いをしている最中においても、工事を前提としたボーリング調査を行い、住民の反発を買っている。いわば道路の沿線住民は、都市計画道路の計画においては、蚊帳の外に置かれ、当事者性を保持しない人々として少なくとも道路課からは扱われている。それは、住民が道路と鉄道における土地の権利者ではないために、市にとって住民がその道路計画に積極的に関わろうと関わらないでかかると明確な権利者としては、関係なくなる。したがって、市の道路計画の概要を説明すれば、一応の責任が果たされたものとして行政組織内ではみなされる。この「道路計画」という枠組みそのものにおいて、住民の「権利」の主張はたいへん乏しいと言わざるをえない。

2. 2 歴史的な自然景観（「夙川の桜」）

これまで長期にわたる反対運動は道路計画変更という枠組みのなかで議論されてきたのだが、そこにはすでに議論の前に構造的なすれ違いが存在する。すなわち、西宮市が地下化に関

する話し合いをし、全く中身を議論しないにもかかわらず、市が道路計画の説明をしたことを根拠に、市民の「了解」を得たという解釈をし地下化事業化を着工することが「議論」を行う前提となっている。関係住民や市民団体から市に対して話し合いを要求するのではなく、むしろ議論を行うことを積極的に行おうとしてきたのは当の行政側である事実からも、この議論の性格がよく示されている。議論のない形だけの「議論」が事業を正当化させるための根拠付けとして利用されている可能性がある。したがって、運動体が、ネットワークや資源動員論からのアプローチにとどまらず、「権利」を主張できる社会的仕掛けを何らかの形で保持していることを論理として押さえておきたい。

というのも、運動体は、運動の方向付けの中でも道路計画の枠組みとは異なる、アメニティや自然環境の保全等の視点で問題を提起している。しかし、住民側の提起は、いずれも行政による巧みでパターナリスティックなレトリックによって、「道路計画」の議題の枠組みに回収されてしまう。その結果として、運動体は、自分たちの提起を自らその議題には沿わないものとして運動の中から引き下げざるをえない状況に追い込まれてきた。そこで、常に絶対的な「道路計画変更」という議題設定の枠組みそのものを相対化するために、道路の「公共性」を維持することで侵さざるをえないアメニティや自然環境の保全という「公共性」の視点から再度この問題を捉えかえてみよう。そのヒントが、反対運動を盛り上げる中で、常にシンボリックな存在となって登場する「夙川の桜」である。たとえば、運動側は、夙川の桜と松を守る会を発足させたり、桜樹に数十にもものぼる短冊をかけたりにしている（図11）。あるいは、毎年桜の

開花時期に合わせて、当該問題に関する署名活動を桜のもとで行ったり、ジャズのコンサートなどの催しを継続的に開いたりしている。すなわち、彼ら彼女らの運動は、桜を媒介にして桜を見に来る近所の住民だけでなくより多くの市民に対する働きかけとしての重なりをもつことになる。いわば桜と運動がリンクしながら、道路とは異なる「公共性」を提起しているのである。そこで桜がもつ「公共性」に焦点をあてながら、立論をたてていきたい。

そもそも、なぜ人々は「桜」をシンボルとして運動を行うことができるのだろうか。もちろんそこに桜が存在することを当然とみなすことも可能である。だが、日本のさくら100選にも選ばれている夙川の桜の景観は、ここ50年ほどで「発生」したたいへん歴史の浅い風景である。にもかかわらず、人々が夙川といえば桜というように、夙川の桜を歴史的な自然景観とみなしているのである。ある種「夙川の桜」として代名詞化されている風景が成立してしまっているのはなぜだろうか。このことが人々の間で意識化され可視化され運動の拠って立つ基盤となっているのである。

それは、2000本を超す桜が自然に生えているのではなく、あきらかに人の手により人為的に植えられた人工的な自然美である。日本の都市における夙川のような小さな河川や河畔は、洪水に備え三面コンクリート張りにしているか、高水位法によって木々が伐採された殺風景な状態が広がっている。それらと比較して、夙川の河畔沿いは、木々が鬱蒼として松林や桜並木が覆いつくすたいへん「贅沢な」環境となっている。言い方を変えれば、都会における夙川クラスの小河川には、何千本もの桜を植えるような場所がそもそも存在しないと考える方が普通で

ある。夙川の桜はそもそも無かった可能性が多分にあり、何の変哲もない河川だったことが十分想定されうる（図10参照）。したがって、都市計画道路ができるような密集した都市空間に桜と人間を結びつける場（装置）がそもそも必要であり、その空間がどのようにできあがってきたかという問いをたててみることにしよう。そのことを最初に明らかにしたうえで、再度桜と人間の結びつき（働きかけ）すなわち歴史的な自然景観の問題に立ち戻ってみる。

3. 1 乱開発と夙川公園整備

現在航空写真（図1・3）からもくっきりと阪神間沿線を縦断する形で緑地帯として形成されている夙川公園を設立するにあたって、当時の状況（1932年）は現在とまったく逆であった。まず市行政が民間の乱開発を食い止めるために、「夙川公園」を設立したことがあげられる（図4・8参照）。公報から当時の西宮都市計画事業の沿革の一部をまとめると次のようなものとなる。

「本川は往古上流の山岳より降雨毎に流下せる土砂を兩岸に掻き上げ漸次堤防広大となり植栽又は天然下種による松樹は左右両堤に亭々として生育し自然風致林を造成せり。（中略）本川改修を万一個人に許さるときはこの風致景勝を滅却し都市計画上大なる蹉跎たるは言を俟たず、此処に於て緑樹地帯又は遊歩道路とし現在の緑樹を保存し進んで公園となすべきを理想とし都市計画法に依り決定方を去る昭和三年八月以来三回に亘り知事に上申し」（西宮市公報昭和7年7月20日第67号：以下下線部筆者）とある。すなわち、どうして西宮市が「夙川公園」を整備しなければならないのかという理由

として、「景観保全」の側面を強く打ち出している。一方それは、市街地化が進む中で夙川の河川改修施行願いや大蔵省による不用な国有地（雑種財産）を無償で払い下げる^②ことや、夙川を埋め立てて宅地化を出願する民間の動きがあったと書かれており、乱開発を防ぐ役割として公園整備が期待されていたことがたいへん色濃く出ている内容となっている。

こうした経緯を踏まえて、本事業の位置づけを次のように総括している。「この附近一帯が西宮唯一の安静なる住宅地域と目せられるは一に夙川兩岸の松樹鬱蒼として一大緑樹地帯を為し近時頃に発展せる該地域に生氣を蘇らしめ、従て遊歩地として四時逍遙行楽に供せられつつ…。幸い内務省兵庫縣の多大の助力を得、種々調査研究の結果松の緑を永久に保存する為には都市計画事業として決定するを最善の方法なりとし、即本事業を計画せる所以なり」（同公報）と結んでいる。民間からの申請をただ先送りすることには限界があり、国と民間開発に対抗するための明確な論拠として都市計画事業を位置づけていたことになる。

当時松林を切り捨てて宅地造成する全国の動きが主流を占めつつあったなかで、松林並木が広がる河岸をコミュニティというよりむしろ人々のアメニティ（快適な環境）としてみなした点において稀有な事例だといえる。いわば、どのような環境を人々が「好ましい」と思うのか、あるいは「心地よい」と思うのかということまでを含めたものを保全の対象として価値づけていたことは、今でこそ当たり前になりつつあるが当時の時代背景としては特筆に値する。さらに松林を保全するために、河川全体を公園化した日本初の事例である（越沢 2002）。阪神間という都市市街地において、長さ約 4 km、

面積にして約 20ha にのぼる公園を河川域に確保することは、「西宮市ノ発展ハ夙川ニマツモノ大ナリトイフモ過言ナラズ」とでまで記されているように、ひとつの市の命運を左右しかねない一大プロジェクトであったのである。裏を返せば、「若しあの時、西宮市長が縣の提議・・・を惜しんでいたならば、今頃はあの長堤の松樹地帯は、附近富豪の邸宅の一部に早変してゐ」（A・B 生 1938）たという証言にもあるように、今私たちが映ずる松林の中に桜並木が連なっている歴史的な風景は、存在しなかった可能性が十分にありえた。では、全国に先がけて、夙川兩岸を公園化していくためには、どのような仕掛けが必要であったのか。つまり、具体的にどのように夙川河畔を整備していったのかという手法がなければ崇高な理念を提唱しただけで終わる可能性があった。このことを次におさえておくことにする。

3. 2 150 間の「受益者負担制度」とパートナーシップ

西宮市が主体となり、事業費（護岸石垣、堰堤、遊歩道、広場など）の大部分を負担することで、西宮市にとってはじめての都市計画決定にいたるわけだが、市の財源にも限りがある。ではどのように財源を捻出することになったのであろうか。そこで取られた手法が「受益者負担制度」である。受益者負担とは何か。通常、不特定多数が使用する道路や公園などの公共施設を建設する際に、全額を税金などの公費を使うが、たとえば下水道などの公共施設が整備されると生活環境が改善されて、「特定の人々」がその利便性を享受したり快適性が向上したりする。その場合、下水道を使用できない人々が

その費用を捻出すると公平を欠くことになるので、下水道整備などによって利益を受ける人々から、直接その建設費の一部を負担する制度である（都市計画法第75条）。

だが、夙川公園の場合、「貧富老幼男女平等ニコノ自然美ヲホシイママニ享受デキル、保健上、精神ノ慰安上コヨナキ公園」（市広報第126号）としてあることからわかるように、明らかに「不特定多数」の人々が利益を得るわけであるので、税金の投入が本来のあり方である。いわば公園はみんなのものとしてパブリックの象徴的な存在でもある。したがって、受益者として「特定の人々」に負担を強いることは、公園というパブリック性に反するものになりかねない。

にもかかわらず、市に財源が限られているわけであるから、公園を整備する現実の手段としては受益者負担を取らざるをえない。しかし、公園が強い公共性の側面をもつとするならば、この「受益者負担制度」を何らかの形で変形しなければならない。それが「150間（約270m）」の受益者負担制度である。まず仕掛けとして、市は公園（都市計画公園）ではなく、“車道のない”道路（都市計画道路）として事業化をおこなった（越沢 2002）。道路であるならば、通常、間口割り（道路に接道していることによって利益を受ける家屋）だけを対象として負担金を課すことになる（末次 1999）。

その範囲は、通例の道路幅員の最大7倍以上をはるかにうわまわる河川の兩岸150間（約270m）を設定していた（図4参照）。なぜこれほどまでの広い範囲を受益者とみなしたのであろうか。その答えは、先述した公園というパブリックな性格に近づける必要があったため、範囲を広くとることで負担感を薄めることができ、

ほぼ100%の徴収実績が得られた。また、西宮市の特徴ともいえる酒造家辰馬本家をすっぽ150間に入れるためではなかったかと推定される^③。それは当時の紅野市長と辰馬氏が旧知の仲であり、市に図書館や市庁舎などを寄贈した経緯からも理解することができる。つまり、辰馬家は酒造業だけでなく、13代目の言葉に「1年の計は穀を植うるにあり、10年の計は樹を植うるにあり、100年の計は人を育てる」とあるように、市の発展のために上下水道などを寄付し、社会奉仕に貢献することを代々おこなってきた歴史をもつ。だがここでは寄付という形ではなく、あくまで制度に関わる一市民として負担している。

都市計画事業の総事業費のうち、受益者負担金が4分の1近くの約24%を占め、それを人々が納めることではじめてこの河川の公園化が実現したことになる。すなわち、この人々の協力をなくして、「一時は利権屋の目標となって、公有水面埋立法の濫用により、醜骸を後世に晒す危険すらあった夙川」（A・B生 1938）の当該事業は成立しえなかったとまで言える。いわば、主体の積極性の有無は抜きにして、人々と市行政との間に河川の公園化を介してパートナーシップを結ぶことによって、民間の開発願いや国有地の払い下げに対抗することができたのである。

3. 3 「環境権」の具現化

ごく私的な利益にからむ受益者負担ではなく、より広い範囲を含む受益者負担によって、夙川公園が成立したことを現代風にみるならば、「環境権」と捉えることができる。一般的に環境権とは、公害などを想定したときに、静穏権、日照権や眺望権など自分たちの環境が著

しく脅かされたとき、それを食い止めるために主に法律の分野から提出された権利の主張である。したがって、環境権はもともと任意の「受苦圏」を前提にした対抗的手段に留まらざるをえない。たとえば、大阪国際空港の航空機騒音公害の際に、原告住民は人格権と環境権を根拠に国に対して空港使用の差し止めと損害賠償を求めたものとして知られているが、最高裁は環境権そのものを認めていない。一部日照権など認められているが、総体的な権利として環境権はいまだ認められていない「絵に描いた餅」というのが現状である。

一方で、夙川の受益者負担制度を「環境権」として捉えた場合、上記の環境権とは異なってみえてくる。すなわち、この環境権がある「受苦圏」を想定し確立されたものである点である。夙川公園完成の式辞で市長は次のように述べている。

「自然ヲ保護シ其ノ景観ヲ助長致シマスコトハ市民ノ情操ヲ涵養スル所以デアリ愛郷愛國ノ精神ヲ強化スル所以デアリ同時ニ市民ノ健康ニ寄与シ延テハ人文ノ発達ニ貢献スル所ノ極メテ重要有益ナル施設ノ一ト存ゼラルルノデアリマス、夙川公園ノ造成ハ斯ル意味ヨリ企テラレマシタル最初ノ事業デアリマシテ・・・北ヨリ南ニ延ヒテ延長二千間広ボウ約九萬坪ニ上リマシテ松ノ老樹若樹ガ長短交差トシテ全地域ニ連リテ居リ・・・遊ブモノノ心ニ適セシムル事ヲキワメマシタ実ニ西宮市トシテハ初メテノ公園デアリ限りナキ喜ビヲ感ズルノデアリマス」(市広報第126号)

環境の定義はまちまちであるが、この式辞を見る限り自然を保護しその景観を守るために公園化を都市計画のなかに取り組むことが、「環境」の定義に当てはまらなないと考えることは逆

に難しい。すなわち、通常「環境権」における環境とは、一定の地域を指すのだが、環境権の主体の範囲を特定するうちに、観念論に陥る危険性が法律の分野からはこれまで指摘されてきた(林・江頭 1984)。その景観の享受は老若男女を問わない市民であることは市税を投入していることから論をまたないが、直接その利益を被る主体が誰であるかを特定すると、先述した「受益者」負担をした人々(150間の居住者)として表すことが可能である。市税の場合、一度集めた税金を再配分するために、税金投与と納税者との関係性は直接的には明示できない。しかし、受益者負担の場合、対象と負担者との関係が直接的に結ばれることになる。

ある特定の利益を他者に対して主張することが「権利」だとすれば、その権利性は総じて高いものとなる。すなわち、利益者が誰であるかを特定した場合、飛躍的にその権利性は高まる。歴史的に夙川公園をみた場合、公園とその周辺住民は切り離されていたのではなく、密接不可分に関わっていたことが明らかになった。しかもその関わりは、単に住民が勝手に決め関わるのではなく、受益者負担制度のなかで、「当の」西宮市により設定され、「歴史的に」負荷された権利者である。言い方を換えれば、この夙川公園の良好な環境保全および景観保全を資する目的で、周辺住民がその整備のために金銭を支払ったならば、当然その利益を享受するための「権利」を住民が有するばかりでなく、環境保全の「義務」を西宮市によって当時付託されたことになる。環境権の根拠となる「当事者性」がかなり明瞭に現れる。いわば、権利者という当事者性の確保無くして現在の夙川公園は成立しえなかったのである。

ここで付け加えなければならないことは、こ

の権利という概念は受益者負担に裏打ちされていることから明らかなように、受益を受ける個人（土地台帳をもとにした地積）に還元されるべきものとするのが一般的である。だが、夙川の公園化は「萬一個人に許さるゝときは此の風致景勝を減却し都市計画上大なる蹉跌たる」（市公報第67号）と捉えられているように、その景観は個人に帰属したり分割されたりするのではなく、個人を超えるみんながその景観や環境を所有している意味で総体的な権利となるのである。

まとめてみよう。ここでいう「環境権」とは、たとえば法律上土地を所有していなくても、それを取り囲む周辺住民みんなが任意の環境や景観を所有していることに基づく総体的な権利である。また、そこでの良好な環境や景観をみんなが享受する「受益圏」を要件として備えているものと置くことができる。さらにこの環境権は、「絵に描いた餅」でなく、制度の中で既成事実化されて具現化されてきたものである。ただこうした「環境権」の考え方自体は、何も目新しいものではなく、歴史を紐解けば、村役のように、労働および金銭を投下したものがみんなの利益になり、その権利と義務を負うという発想が基底にある。そのような発想がたまたま行政への過剰な依存および権限委譲によって失われ、今日改めて「環境権」としてクローズアップされているのである。

3. 4 歴史的自然景観（「夙川の桜」）と公共性

前節では環境権をもとにして夙川公園が成立したことを論じたが、桜と公園との強い結びつきは、1950年代以降を待たなければならない。

それまでは、夙川といえば「松」であった。それが50年代に入って「夙川の桜」に変貌したのは、1949年に「戦災より雄々しく立ち上る市民の為に大なる慰めとならんことを祈念して」当時の辰馬卯一郎市長が140万円を投じて桜樹2000本を夙川公園の遊歩道路に植樹してからのことである。

では、松林が繁茂する公園化の時代と桜並木の時代とでは何が根本的に異なるのだろうか。桜並木の時代は、受益者負担制度が想定したように、松を守ることでその環境を享受できる人々すなわち、公園周辺の人々におおよそ限定されていた。150間という広範囲な人々を含むとはいっても、それは西宮市の一部の市民であったわけである。ところが桜が一斉に開花する時期になると、その関わりはさらに広がることとなり、今では阪神間屈指の桜の名所として「発見」され、多くの人々が夙川公園に集うこととなる。桜並木の時代にもうひとつ開花させたものがこの桜がもつ「公共性」である。

通常「公共性」は、フリーライダーを許さないためのルールとそのメンバーシップが問われることになる（長谷川 2003）。公共性の要件から差し引きをし、ある公共財を公平に分けるためにはどのような分配方法が考えられるかについての「限定化」を問うてきた。こうした差し引き（「減算」）や限定化（「割算」）は公共性論における一側面を示しているしかすぎない。桜の場合は全く逆である。

桜によって人々が集まってくる。または桜が人を集める。それも老若男女を問わないだけでなく、病院から車椅子を家族に押してもらって花見に来る人々、乳母車に乗せられた赤ん坊、桜に託けて宴会を楽しむ酔っ払いや学生たち。携帯片手に煙草をふかしながら桜を見るヤンキ

一の兄ちゃんまで。外国人の人々も物珍しそうに見ている。人間だけでなく、犬やペットも同伴している人々も目立つ。服装もここでは自由である。学ランを着た学生やあでやかな着物を着た婦人、ランニングシャツでも構わない。家族連れ、カップルやグループ（同好会）いろんな単位の人々が集ってくる（図6参照）。桜は公共性における何を提供してくれるのかと考えると、排除（なくす）ということに力点があるのではなく、何もかも受け入れるいわば「加算」方式にその本質がある。富める者も貧しい者も分け隔てなく等しく受け入れる場である。しかもこれだけの異なる人々が集う場所であるにもかかわらず、その表情は春麗らかな日差しのもとで、一様に陽気で楽しく時を過ごしている。

このような風景は、桜が人々を呼び寄せて作りだした「ソシオロジカル」な景色であると考えることができる。ソシオロジカルな風景とは、佐藤健二が柳田国男の風景論を俯瞰しながらエコロジカルな景色とは異なる人間の実践論理として析出しているものである（佐藤 1992）。そのあたりの論理を追いながら、夙川の桜の位置づけをしてみよう。それまでの風景論が、「旧事旧蹟についての教養のお説教が無垢なる大自然の賛美かの両極端しかもたなかった」とまとめたうえで、柳田の記述は、「その時代において生産された風景の『新しさ』の再評価、再検討を示唆していた」（佐藤 1992:192）と解く。具体的には、「里に近い風光を『発展期』のものとして、松島や海金剛のめずらしい岩が織りなす『末期』の風景と対比させながら分類するとき、そこには風景は発展するものであるというという考えと、その発展の中心に人間たちがいるという二つの論理がかくされており、『新しい風景』をむしろひとびと自身が人間の

繁栄のあかしとして感受していた、その位相を重視する」（佐藤 1992:190）ものとして柳田の風景論を佐藤は評価している。

夙川の桜樹の風景をどのように見るかについて柳田の風景論はヒントを与えてくれている。今まで見てきたように、夙川の桜は約50年というたいへん歴史の浅い風景であるが、整備された夙川公園に桜樹を植樹することによって、単なる空間が社会的・歴史的意味を負荷された「場所」に発展した風景である。雄大な自然が織りなす風景ではなく、人の手が徹底的に加えられた人工的な「自然」美である。この歴史の浅さと人工美を歴史的な自然景観として扱うことの意義は、景観そのものを固定化された不動のものともみなのではなく、むしろそこで新たに生産され、創造され、かつその「新しい風景」を人々が享受する豊かさの価値を積極的に評価していくことにある。ここでの人々とは、今では阪急をはじめJRや阪神なども集客のよび水として「夙川公園の桜」を利用しており、もはや周辺住民に止まらず、関西一円程度の広がりをもつこととなった。

まとめると、受益負担制度という居住権をもとに造られた夙川公園は、松樹林を背景とした桜樹並木がつらなるみごとな風景を生み出した。今度はその桜樹並木が、老若男女や貧富階層などの差異に関係なく、大勢の人々を呼び寄せ、豊かさの実践に結びつかせた。すなわち、「環境権」という限定化された権利を元にして、夙川の桜並木という荘厳な「歴史的な自然景観」が生じた。この発展的な景観には、「公共空間」における開放性と平等性を人間が享受している繁栄としての景観の位相が包含されている。いわば限定化された「権利性」と開放性を謳う「公共性」という相矛盾するものが同じ位相で

もって結果として結びついたことになる。

以上のことが、運動のある程度の性格を規定していくことになる。すなわち運動を支えるグループには2つの核がある。ひとつの核が、環境権という「権利性」に関わる居住者を主体とした住民である。もうひとつの核が、桜という「公共性」に関わる市民である。すなわち、この後者の市民運動体（「甲陽線地下化を考える市民ネットワーク」）は、桜の景観を享受する多くの人々を中心として広がりをもったグループとしての位置づけを行うことができる。したがって、そこでの運動の属性も老若男女や貧富階層出身を問われることはないし、運動の会則やルールも特になく自由に発言できる場となっている。このことによって、運動は、絶妙なバランスで「公共性」と「権利性」の両方を行き来しつつ、ひとつのまとまりをもつことになる（図12参照）。

4. 結語

本論文では、歴史的な自然景観における権利性と公共性の具現化をメタな倫理状態とおき、いかに両者の矛盾する課題を克服し結合するのかということを論じてきた。まずなぜ人々が「桜」をシンボルとして運動を行うことができるのだろうかという点について、都市計画道路ができるような密集した都市空間に桜と人間を結びつける場（装置）がそもそも必要であり、その空間がどのようにできあがってきたのかという歴史的な問いを通して考えてきた。そのことを最初にあきらかにしたうえで、再度桜と人間の結びつきという歴史的な自然景観の問題に立ち戻って分析してきた。このことをもとにして、若干の考察と提言、およびその展望をみておくこと

にする。

まず、市の都市計画道路の計画は、利便性や安全性の向上を目的とした「公共性」が存在する。だがこれだけでは今日事業をすすめるにあたり、正当化の事由として乏しい現状がある。当時の公園事業の担当者の、『十九世紀は道路構築の時代であり、現世紀は公園造成の時代である』とせらるる。実に、公園緑地の造成と保存こそは都市計画、否国土計画の最終且つ最高の目的とも謂ひ得らるる」という考え方があるが、このことを政策上の価値として実現してきたのが西宮市であった。このため、「道路の計画のために、一部の桜樹を切ることは止むを得ない」という考え方や、「支障となる樹木については可能な限り移植により保護する考えである」（市道路課）という見解は、本稿が取り上げてきた市の政策からみると、そのような単純なものでないことがわかる。

すなわち、道路課がなぜ一部の樹木を切ってもよいという判断をできるのかといえ、ひとつはその土地が一部民間（阪急）の土地と西宮市及び兵庫県のものであるという所有にもとづく「権利性」を根拠にしている点である。もうひとつは、昭和21年の都市計画法に拘束され、道路がネットワークとして結ばれることによって利便性が向上するという「公共性」を謳っているという点である。このような法律的な根拠だけが前面に躍り出ると、自分たちの土地だから何をしてでも許されるという合法的な土地収奪行為として人々の目には映る。歴史的に培われてきた場所は、単なる空間となってしまう。

一方で住民は、こうした法律的な土地の所有権とは違う根拠をもって、空間に関わる権利を保持しているのではない。まず、西宮市は、本来桜のような一瞬にして吹っ飛んでしまうよ

うな目に映ずる視覚的な景観を、都市における計画性の高い空間に位置づけ、公園整備を行った。つまり、民間などの乱開発を食いとどめるために、空間をどのようにコントロールするかという地政学的な結びつきとして公園整備を捉えていた。そのためには、150間に住む周辺住民を協力すべき主体としておいてその空間に「権利」を持たせる施策を実行したのである。通常権利性は、独占的排他的なものになりやすいが、一方においてそこに桜樹を置くことによってあらゆる人々に対する開放性を伴ったものとなった。この点が道路の公共性とは異なる「公共性」を導き出す。

すなわち、「公共性」を考える場合には、先行的な価値理念を同定する、その為の理念的基礎つまり「正義」が必要であると井上達夫は説く（井上 2002）。そこでの正義とは、「異質な他者」と共生しようとするときの基礎となる価値である。いわば我々の価値が公共的だというコミュニタリアンの「排除性」に対し、自己の権力性を暴き出し、それに自己批判的なコントロールを加える役割を正義が担い、他者の視点から見てもフェアだと思えるような事由を要求するものとしてみなしている。その点でいうと、夙川公園は、排除性にポイントがあるのではなく、異質なものの包含性に重点が置かれているといえよう。

いわば反対運動の主体となっているものは、道路拡張に伴う我々的な「受苦圏」がもっているのではなく、この夙川の景観は「みんなのものであるという感覚」をもとにした、桜樹と松樹の景観および環境を享受する「受益圏」との重なりをもつ。いわば土地を所有する根拠とは異なって、景観を所有する「公共性」がここでは問われているのである。たいへん権利性

という「強い」ところでは、当時の受益者負担制度によって住民が拘束されているし、公共性という「広い」ところでは、桜樹の景観を享受する人々すべてに開かれているといえてよい。したがって、それは少なくともこの（公園）周辺の人々の同意なくして、夙川公園の環境改変は勝手には行えないという論拠になる。そうでなければ、景観を享受している当事者性の権利を剥奪し、法律的には合法的であったとしても、歴史的慣習的な側面からみれば、行政が場所性を無視して二重の相反する政策（松や桜のために道路を排除することと、道路のために松や桜を排除する施策）を空間に設定することとなる。西宮市の政策から考えた場合、環境権とそれに付随する歴史的な自然景観の位置づけは、パートナーシップの「継続性」と「（文化的歴史的）財産」管理というローカル・ガバナンスとしての政策の転換と方向性を示しているといえるだろう。

註

- ① 都市計画道路山手線の計画変更問題対策協議会（構成員：北名次自治会・神園町一番緑と空気を守る会・甲陽園道踏切を確保する会・夙川公園の桜と松を守る会）、甲陽線地下化を考える市民ネットワーク（市民団体）を中心に運動が長年展開されてきた。
- ② 「大蔵省は昭和初期のデフレーション、不況、国家財政難のため、雑種財産の整理に着目し、売却可能な国有地は積極的に処分する方針を採用し、…雑種財産整理委員会が夙川を視察することとなった。委員会は、河川敷の両側 3 m を残してそれ以外の全ての河岸地 7 万坪を雑種地とする考えであった」（越沢 2002: 37）

- ③ 白鹿記念酒造博物館の寺岡課長のインタビューより。

参考文献

- A・B生, 1938, 「夙川公園（遊歩道）は如何にして出来たか」『公園緑地』第2巻6号.
- 足立重和, 2001, 「公共事業をめぐる対話のメカニズム—長良川河口堰問題を事例として」船橋晴俊編『講座環境社会学 第2巻 加害・被害と解決過程』有斐閣: 145-76.
- エドワード・レルフ, 1991, 『場所の現象学—没場所生を越えて』ちくま学芸文庫.
- 藤村安芸子, 2002, 「『風景』と『人生』—柳田国男の紀行文をめぐって」『季刊日本思想史』62: 89-103.
- 長谷川公一, 2003, 「第11章共同性と公共性の現代的位相」『環境運動と新しい公共圏—環境社会学のパースペクティブ』有斐閣: 193-210.
- 林迪広・江頭邦道, 1984, 『歴史的環境権と社会法』法律文化社.
- 堀川三郎, 2001, 「景観とナショナル・トラスト—景観は所有できるか」鳥越皓之編『自然環境と環境文化』講座環境社会学 第3巻 有斐閣: 159-90.
- 井上達夫, 2002, 「他者に開かれた公共性」佐々木毅・金泰昌編『公共哲学3日本における公と私』東京大学出版会: 143-68.
- 片桐新自, 2000, 「歴史的環境へのアプローチ」片桐新自編『歴史的環境の社会学』新曜社: 1-23.
- Kevin A.Yelvington, 2002, “History, Memory and Identity: A programmatic prolegomenon,” Critique of Anthropology 22 (3)
- 木原啓吉, 1982, 『歴史的環境-保存と再生』岩波新書.
- 木岡伸夫, 2002, 「沈黙と語りの間」安彦一恵・佐藤康邦編『風景の哲学』ナカニシヤ出版: 37-56.
- 越沢 明, 2002, 「パークウェイとして整備された夙川公園の特徴とその意義」国土交通省道路局編『今、転換のとき』社会資本整備審議会中間答申:3443.
- 森川 誠, 2003, 「国立景観裁判について」『地域開発』464巻.
- 荻野昌弘, 2002, 「地域と文化遺産」荻野昌弘編『文化遺産の社会学』新曜社: 271-80.
- 佐藤健二, 1992, 「日本近代の『風景』意識」古川彰・大西行雄編『環境イメージ論』弘文堂: 178-215.
- 末次忠司, 1996, 「夙川公園建設に見る受益と負担」第19回土木史研究発表会レジュメ.
- 寺戸善之, 1932, 「公園整備を施したる夙川遊歩道計画に就て」『都市公論』第15巻12号: 51-60.
- 梅木達郎, 2002, 『脱構築と公共性』松籟社.